

遊びをせんとや生まれけむ

——近代のスポーツと日本人の身体観・序論——

白幡洋三郎

- 1 うずくまる人びと
- 2 五禽の戯れ——近代日本の外来スポーツ
- 3 「父母の残せる身なれば、つつしんでよく養ひ」——養生論の中の身体と日本の民衆娯楽
- 4 こどもは風の子——スポーツの普及と教育の中の身体運動
- 5 遊びをせんとや生まれけむ——スポーツと道德的娯楽観

1 うずくまる人びと

私は、明治初頭一八七二年に写された、ある一枚の写真を見て、深い感慨にとらわれたことがある。⁽¹⁾ (写真1)

その写真は、当時横浜の根岸にあった競馬場を写した写真であった。背景には観客がいっぱいにあふれているスタンドが写っている。

手前の競走路では、つきつぎに馬が疾走し、駆け抜けていたはずである。もつともこの写真には馬は写っていない。たとえ、馬が駆け抜ける瞬間を狙ったとしても、当時の写真は、長い露出時間が必要だったため、疾走する馬のようなスピードのある被写体は写らなかつたからである。

画面右手には、山高帽をかぶった恰幅のよい人物が立っている。この人物の表情は、写真自体が鮮明でないため、そしてまた豊かな髭と帽子に少々隠されているせいもあって、はっきりとはよみとれないが、決して無関心な態度ではない。いやそれどころか、むしろ競馬の進行に関心を示し、深くかかわっているといっても誇張ではない様子である。この人物は、日本の新聞のその後の歴史に大きな影響を与えた、当時の横浜居留地の有名人ジョン・レディ・ブラック(一八二七—一八〇)ではないかといわれる。ブラックは一八六一

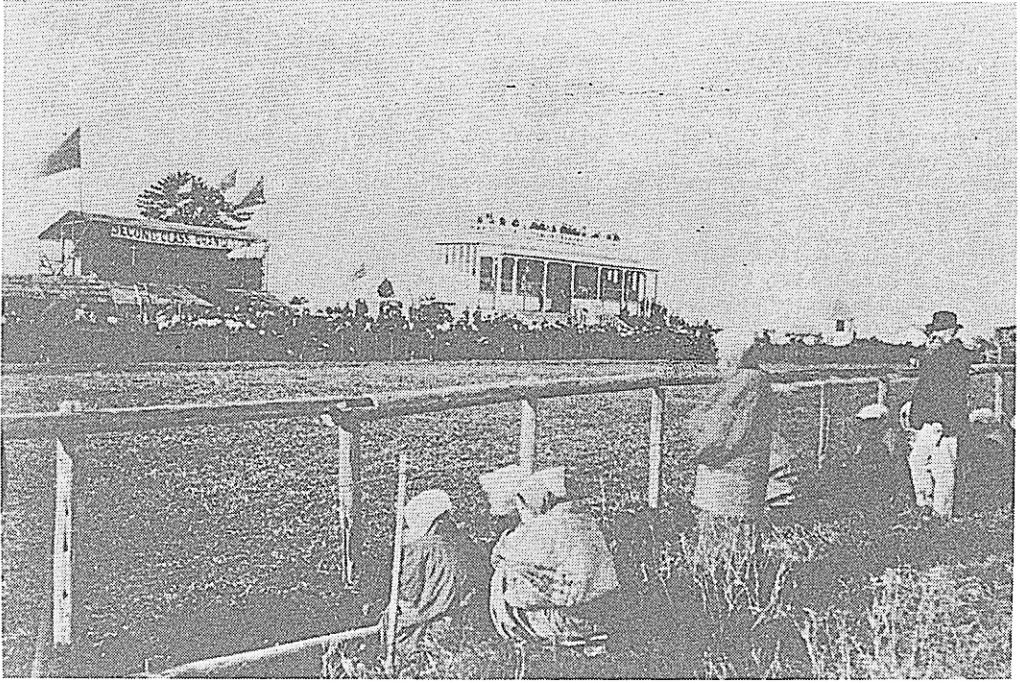


写真1 根岸の競馬場 (The Far East 1872年11月16日号、雄松堂書店、復刻版より)

年、英国人A・W・ハンサードが横浜で刊行をはじめた「ジャパン・ヘラルド」の編集者として迎えられ、一八六七年には自ら独立して日刊紙「ジャパン・ガゼット」を刊行し、その後絵入り新聞の草分けともなった一八七〇年発刊の週刊新聞「ザ・ファー・イースト」の編集・発行人にもなった。ブラックを写した写真はほとんど発見されておらず、その点からもこの写真はたいへん興味深いものなのではあるが、私が深い感慨にとらえられたのはそのことではなかった。

私が深い感慨にとらえられたのは、写真の画面のすぐ手前にうずくまるように写っている数人の日本人の姿のせいだったのである。ほかかむりをしたこれらの人物の姿勢からは、競馬を眺めてはいても、関心をもっている様子も、また興奮しているような雰囲気もまったく窺えない。おそらく彼らは、その服装から考えても、近郊の農民であろうと思われるが、じつとうずくまるようにしゃがんだ姿には、何か諦念のようなものが漂っているように思われたのであった。この根岸の土地を競馬場として取り上げられたためであろうか、それともあまりのにぎやかさに農作業への意欲をそがれてやってきたせいであろうか。ともかく彼らのその当時の境遇をどのように思い描くにしても、その姿からは、自分の身体動作のみならず他人の身体的動作に対しても、じつに徹底した無関心が重く漂っているのが感じられたのである。

そこには今日の競馬場の興奮や、多数の競馬ファンの存在へと連想を誘うものはない。私には、彼らの姿から、単にわが国にまだ馴染みの薄かった競馬に対する無関心ではなく、身体を激しく動かし、スピードを伴うスポーツに対するじつに徹底した無関心、いやそれだけでなく、とにかく身体運動に対する無関心が感じられたのであった。

しかし彼らは、競走路の内側にいるようだ。積極的に見物に来たのではない者が、競走路の内側に入り込むことは考えられないから、彼らは、コースの清掃や馬の世話など、競馬の進行上必要な雑務のために雇われている者たちではないだろうか。だから当然、彼らには競馬に対する積極的な関心を示す雰囲気を感じられないのだ。そんな風にももちろん考えられる。

だがそれにしてもこのうずくまった生氣のない姿勢はどうだろう。彼らは、春の花見や秋の収穫に伴う村の祭りなど、地域の娯楽を積極的に担う、朗らかな、元氣にあふれた人々なのではないだろうか。時と場所を得れば、きつと快活にふるまい、にぎやかであるはずの人々の、この沈んだ重苦しい雰囲気はどうしたことだろう。

私が、近代の日本人にとってスポーツとはなんであったかを考え始めたのは、この写真から受けた感慨が一つのきっかけとなったのである。

2 五禽の戯れ

—近代日本の外来スポーツ

スポーツの歴史をふりかえってみると、おおざっぱに言って近代特に一九世紀以後は、それ以前一八世紀までと大きくスポーツの内容が変わってきたことがわかる。イギリスでは狩猟がときにはスポーツと称されるように、屋外での代表的スポーツに狩猟があった。狩猟は紳士のスポーツの代表であったが、弱いうさぎや狐を大勢のハンターが、それもたくさんさんの猟犬を使って追い回し追いつめてゆつくりなぶりごろしにするという、言うならば弱いものいじめであった。

日本の犬追ものにしても同じである。相撲や拳法などの格闘技には、現在のような整ったルールはなかったとはいえ、対等な立場にもとづく一応のルールがあったが、ほとんどは人間の原始的で野蛮な好奇心とでもいえるようなものを満足させる弱いものいじめであったと言っている。それらは、のちのスポーツにみられる身体を動かす楽しみを目的にしていなかった。

狩猟・犬追ものなどは、戦闘行為に役立つ技術を身につける意図があったとしても、そしてまたその結果が、身体鍛練に結びつくことは意識されたとしても、身体を動かすことが目的としてかかげられることはなかったし、また身体を動かすことが同時に楽しみであることと自覚されはしなかった。身体運動の楽しみを保証するフェアプ

レイヤ対等のルールといった平等精神も、これらかつての「スポーツ」とは無縁であった。

つまり大ざっぱに言つて、一八世紀以前は弱いものいじめのスポーツが、そして一九世紀以降は平等なルールにもとづくスポーツが、スポーツの歴史であるといつてよいだろう。しかもそれは、イギリスに始まったものが多く、またそれは世界各地に伝播し、受け入れられて広まっていった。

野球やバスケット・ボール、アメリカン・フットボールなどいわゆる「アメリカン・スポーツ」を作り出したアメリカ合衆国にしても、南北戦争の時期までは、イギリスに始まる狩猟や競馬が主たるスポーツであった。⁽²⁾ また、一八世紀までは宮廷文化を軸に、ヨーロッパ世界の文化の中心を自負していたフランスにおいても、第二帝政の終わり、すなわち一八七〇年頃までは、イギリスに生まれたボート競走、ゴルフ、テニスなどがスポーツの主なるものであった。⁽³⁾ 現在もフランス人のあいだで人気のある自転車競走が、例外的に自國の発明品として一九世紀初頭から人気を得ていた。

なぜイギリスにおいて平等のルールにもとづいたスポーツが多く生まれ育ち、他の地域に伝播していったのかは、まだ十分に説明できていない問題であろう。近代化の過程と各種スポーツの誕生とのかかわりはスポーツ史や教育史の他に人類学、身体論、娯楽等の問題とかかわってくるはずである。

ガットマンは近代スポーツを定義して、次のような七つの特徴をあげた。それは世俗化、平等化、役割の専門化、合理化、官僚制的組織化、数量化、記録の追求の七つである。⁽⁴⁾ しかし私は、この七つのうちでスポーツを近代と切り離しがたく結びつけた最も重要な特徴は平等化であろうと思う。とくに平等のルールこそは、スポーツが民族的・地域的な娯楽という、いわば文化にいろいろられた枠を飛び越えて、如何なる民族、如何なる地域でも受け入れられ、どこにでも移植できるいわば文明の装置として自立するための重要な条件であったと考える。

近代以前は、文化としての「スポーツ」だけが存在し、社会の体制それ自体からしても、また建前としても平等はありえず、誰も平等の条件のもとでのスポーツなどという考えはもたなかったのではない。近代のスポーツを成り立たせる平等観はみられなかったのである。日本近代におけるスポーツの意味を考える上で、「スポーツの近代化」という問題の立て方は、あまり実りのある成果を生まない。近代における日本社会のスポーツ受容のありようをとらえるこの方がずっと意義深い。

現在行われている日本のスポーツの多くは他の西洋文明、近代文明と同じく幕末の開国によつてもたらされたものである。すなわち西洋諸国との接触によつて知ったスポーツである。接触には日本人が外国に出かけた際の見聞や経験があった。もう一つは日本を訪れ

た外国人が行ったスポーツを日本人がみたことによる。その多くは外国人居留地で行われたものであった。外国人居留地で行われたスポーツは、当時の西洋で行われていたほとんどすべてのスポーツがあった。⁽⁵⁾ というのも、故国を遠くはなれた彼らは、自らの出身国と出身階級の相互確認のため、たえず様々な行事を通して、彼らの同一性を確認しあう必要に迫られていたからである。

しかしながら、日本人は海外に出かけた際に見聞したり、居留地で行われた外国人のスポーツを直接観戦・見物したにもかかわらず、それを即座に取り入れることはできなかったように見える。日本人と外国人の対抗スポーツ試合はないわけではないが、ある限られた人々によるものであるとの印象を受ける。なぜ日本では、スポーツについて豊富な情報が手に入れられたにもかかわらず、それを実行する上については遅れていたのでしょうか。いくら見聞や知識が豊富でも、実際の行動に結び付くとは限らない。日本人は、豊富な情報をもちながらも、やはりただちにはスポーツに手を出そうとはしなかった、といえる。それは日本人の特性だろうか、近代をむかえる日本にすでに存在した養生思想など、消極的な身体観の故だろうか。それとも日本人に限らず、近代のスポーツが導入された国においては一様に起こった態度だったのであるうか。

この疑問に答える前に、ひとまず日本の近代における外来スポーツ導入の歴史を概観しておきたい。

わが国で近代的なスポーツを最初に行った事例はいつ見いだせるかは、近代の概念やスポーツの概念を確定することなしにはむづかしいだろう。しかしながら、近代の年表をひもといてみると、明治初頭から目につく事例がつつぎと見出されることは容易に指摘できるのである。⁽⁶⁾

たとえば、日本最初の洋式運動会と言われるものは、明治元年、江戸幕府直営のものをそのまま受け継いだ官営の横須賀製鉄所で行われた。この製鉄所はフランス人技師を多数雇い入れて発足したためか、この年日本人とフランス人が合同でパリ祭を行い、同時に職工たちの慰安のための運動会を挙行したものであった。

また、初めてフランス式体操が行われたのは、慶応三年のことで、これには江戸幕府が軍事顧問として招いたフランス人のシャノワールが幕府に建白した、軍人のための体操の必要性を説く意見が大きく影響していた。

福井藩の藩校で明治三年に体操が行われたのは、藩主松平春嶽に招かれたアメリカ人グリフィスの意見によるものであり、また、広島藩や福江藩でもこの年イギリス式体操が藩校において行われ、あるいはまた軍事訓練のために採用された。一方同じ年に弘前藩ではフランス式体操が実施され、あくる明治四年には徳島藩や、近衛鎮台でもフランス式体操が行われた。このようにわゆる「洋式体操」導入の例は枚挙にいとまがないほどである。

ただここで大事なことは、あるいはイギリス式、あるいはフランス式の違いはあってもすべてに共通するきっかけは、お雇い外国人たちからの情報、もしくは海外からの何らかの情報によるものであり、またその多くが軍事と関係していたことにある。それ以前の日本には、日本のスポーツとっておかしくない武芸があったが、幕末・明治になると、それとはまったく異なる「体操」が各地で行われるようになったことは軍事に対する姿勢がはっきり変化を遂げたことをも示している。

一方、学校教育の分野でも、外来スポーツの開始と見なせる例が明治初期から現れる。一例として、明治四年には慶応義塾が校舎を三田に移し、塾生の運動のために校庭にブランコや鉄棒、シーソーなどを設置したことが挙げられる。この年に制定された「食堂規則」のなかに「午後晩食後は、木のぼり、玉遊等、『ヂムナスチック』の法に従ひ、種々の戯いたし、勉て身体を運動すべし」という条項があり、これに見合う施設が調えられたものであった。⁽⁷⁾そしてこれが生まれる背景には、福沢諭吉が得ていた欧米の諸学校の見聞にもとづく情報があった。

福沢は慶応二年（一八六六）に著した『西洋事情』のなかで、「遊園」の項を立て、そこで「柱を立て梯を架し綱を張る等の設をなして学童をして柱梯にのぼり或は綱渡りの芸をなさしめ五禽の戯を為て四肢を運動し苦学の鬱閉を散じ身体を健康を保つ」と校庭の

機能と備えるべき施設を説明しているのである。この考えにしたがって慶応義塾の校庭も整備されたのであった。

しかしこれらは、幕末・明治初期の例としてはきわめて例外に属するものというべきであろう。ヨーロッパの近代に誕生したスポーツを積極的に取り入れようとしていたのは、「洋式」をはじめから肯定して設けられた機関だけであった。とりわけ軍隊と学校が西洋起源の外来スポーツを取り入れる窓口だった。身体運動は、そうやすやすとは一般民衆に受け入れられなかったように思える。外来スポーツ導入に関して、きわめて積極的であった慶応義塾においても、創始者福沢諭吉の表現にみられる「五禽の戯」れには、身体運動はやはり「戯」れで、その役割は「苦学の鬱閉を散じ」るものであり、学問を主とする觀念が抜きがたく存在していたのではないだろうか。

3 「父母の残せる身なれば、つつしんでよく養ひ」

——養生論の中の身体と日本の民衆娯楽

欧米のスポーツに当たるものが、武芸という形でわが国にも存在したという考えは明治年間にいくつも現れる。しかし武芸については次のような考えが存在していたのである。

「武士の子には、学問のひまに弓馬、劍戟、拳法などならはしむべし。但しひたむきに、芸をこのみすごすべからず。必ず一事に心うつりぬれば、其事にをぼれて、害となる。学問に志ある人も、芸をこのみ過ごせば、其方に心かたぶきて、学問すたる。学問は専一な

らざれば、すずみがたし。芸は、学問をつとめて、そのいとまある時の余事なり。……また、軍学・武芸のみありて、学問なく、義理をしらざれば、ならふところの武事、かへりて不忠不義の助となる。」(傍線は筆者)

このように、貝原益軒は『和俗童子訓』で述べているが、武芸というものは、確かに武士の子にとって必要なものとされてはいたが、まず「学問」が優先され、「学問のひまに」行うべきものであり、「そのいとまある時の余事」とする考えがあったのである。貝原益軒の時代は、一七世紀後半江戸幕府の政権が安定し、武士の武力的鍛練については、国内の治安維持の面などからも消極的になつていた時代とはいへ、それにしても、文武両道というよりは、文としての「学問」を武芸より優位に置く考えを、当時のオピニオン・リーダー的人物が明言していることの意味は大きい。現代からの解釈を強調して述べるならば、ここには身体運動に対するきわめて消極的な態度が窺われるのである。

さらに、『養生訓』では次のような考えが現れる。

「人の身は父母を本とし、天地を初とす。天地父母のめぐみをうけて生まれ、又養はれたるわが身なれば、わが私の物にあらず。天地のみたまもの、父母の残せる身なれば、つつしんでよく養ひて、そこなひやぶらず、天年長くたもつべし。是天地父母につかへ奉る孝の本也。」

要するに、生まれおちた身体を鍛練によって向上させ、もとのもの以上につくりあげる発想はない。身体は父母から授かった価値を損なわないよう、低めないよう「つつし」むことによって維持される。それが身体に向きあう最上の対応である。だから「養生の道は、病なき時つつしむにあり」という指示がでてくるのである。もっとも、こうした考えを、所属する共同体に拘束される身体という考え方だとみなせば、これに對置される「個人の固有な身体」という意識の誕生の地とみなされるヨーロッパにも、血統という觀念の中に身体についての同じ様な考えがあった。自分だけの身体ではない、いわば継承されてきた身体という考えである。ロラン・バルトのいう「この血統の行きづまり、それが私の身体だ」という意識はそのままであらわれであり、子供の名前に名づけ親や祖父母の名前を継承するヨーロッパの慣行もそのあらわれであったといえよう。

それにしても、個人の身体は「養はれたるわが身なれば、わが私の物にあらず」とする養生論のなかには、また、

「起居・動静を節にし、つつしみ、食後には歩行して身を動かし、時々導引して腰腹をなですり、手足をうごかし、労働して血気をめぐらし、飲食を消化せしむべし。」

といったように、身体にとっての運動が、せいぜい消化機能を助ける役割しか期待されていないような記述もみられるのである。

このように、身体運動が人間の精神に対してもまた肉体そのもの

に対してもきわめて消極的な役割しか与えられていない身体観からは、身体運動がつくりあげる娯楽といった観点はもちろん生まれなかった。

ほとんど類書のない研究業績である倉田喜弘氏の『明治大正の民衆娯楽』には、当時の民衆娯楽の花形であった十幾つの娯楽のジャンルが挙げられている。これによって明治大正の民衆が好んだ娯楽の全体の輪郭がつかめるのだが、そのジャンルは軽業、生人形、講談、どどいつ、歌舞伎、落語、手品、壮士芝居、浪花節、戦争講談、琵琶、娘義太夫、新劇、洋楽である。⁽¹³⁾そしてそれらはすべて、いわば寄席や劇場で行われる見せ物・演じ物であったことに注目したい。これを娯楽として享受する人々の身体とはまったく関わりがない。

軽業は演じる側にはきわめて多くの身体運動と訓練が要求されるが、これは観客の側の身体運動とはまったく結び付かない。挙げられた娯楽の中では唯一「生人形」が見る人の身体運動を少しは引き出すといえようか。菊人形は、きわめて多数の観客を引き出し、見物のため彼らの足を十分に動かすよう仕向ける。しかしこれを除くと、民衆は身体を動かさない娯楽に夢中だったことがはっきりする。明治には確かに、また大正期に入っても、大多数の日本人の主たる娯楽は、身体運動とのかかわりでは『養生訓』の時代と基本的には変わらなかったのである。

また、明治前半の時期には、海外の運動・衛生・保健関連の書物

が「養生」のタイトルをつけられ翻訳出版され、また身体運動を含む国内の保健関連書物も「養生」のタイトルがつけられることが多かった。明治一〇年代の半ば頃から「養生」に代わって「衛生」のタイトルが増加してくる。ただ「養生」の観念においても、「衛生」の観念においても身体的価値は、すでに生まれおちたときから「天地のみたまもの、父母の残せる身」として存在し、その価値を減らさないこと、傷つけないことが良しとされたのである。「学問」によって、価値が増加するとされた知的領域では、いうならば攻めの姿勢が称揚されたが、身体の価値は防御によってなんとか持ちこたえることができ、守りでしか維持できないものであった。

4 こどもは風の子

——スポーツの普及と教育の中の身体運動

明治・大正の民衆娯楽の中には、身体運動にかかわるものはほとんどなかったが、上流階層では、身体運動あるいはスポーツと表現してもよい娯楽が現れていたことは否定できない。例えば二輪の自転車は、裕福な人々の間で明治二〇年頃から流行し始め、明治三〇年代にはさらに広がりを見せた。

明治一八年東京帝大の学生クルーは横浜の居留外国人たちのクラブ、横浜アマチュア、ローイング・クラブ(YARC)とフォアで初の競艇試合を行ったが、その後フォアのほかエイトなど東京帝大と横浜在住の外人とのレガッタは恒例の試合となった。⁽¹⁴⁾さらにそ

の後一高や、高等商業のクルーが加わり日本人と外国人のスポーツ大会としてレガッタは世に知られることとなった。

野球については明治二〇年代のはじめから日本の野球界をリードすることになる一高がこれも横浜在住の外国人のクラブである、横浜カントリー・アンド・アスレチック・クラブ（YCAC）と明治一九年に最初の交流試合を行って先鞭をつけ、その後横浜商業、学習院、早稲田、慶応などの野球部がこれに加わって頻繁に内外交流試合が行われることになった。⁽¹⁵⁾ その他、陸上競技や水泳なども含め、欧米起源のスポーツはエリート予備軍である大学生の間で明治二〇年代に受容され、対抗試合が行われるという歴史が描ける。

レガッタは横浜では港に停泊中のイギリス船の乗組員によって、一八六三（文久三）年頃から行われ、一八六五年頃からは居留地外人も参加して行われるようになったといわれ、陸上競技では横浜と神戸にそれぞれ在住する外国人たちによって最初の競技会が行われたのが一八七一（明治四）年、水泳大会も同時に行われたようであるが、横浜の外国人たちは、すでに明治初年頃には、本牧岬付近で水泳を行っていたといわれる。⁽¹⁶⁾ すなわち外国人たちが主に居留地へ海外から持ち込んだスポーツを、日本人エリートないしエリート予備軍である学生が見たり、教わったり、また別の情報源からニュースをいれたりして消化して行き、ようやく対抗試合が可能になるのが明治二〇年代に当たる。

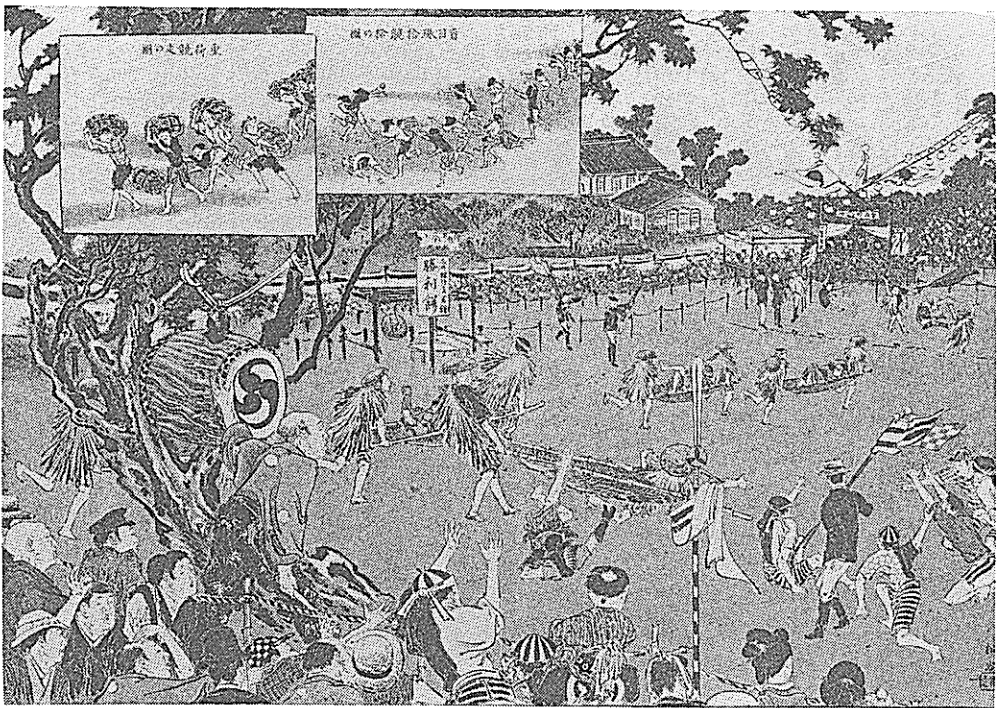


写真2 明治27年5月26日に行なわれた慶応義塾大運動会・担架競走の様子（風俗画報、明治27年7月10日号）

水泳に関しては、まだエリート層や上流階級中心だったとはいえ海水浴が、夏には特に大阪や東京などの大都会の浜辺で好んで行われるようになり、民衆的な広がりを見せ始めた。また一方、学校教育においては、明治二〇年代から小学校において現在のそれにつながるような運動会が各地で催されるようになった。これに先立つ明治一九年に、慶応義塾は第一回の運動会を「遊戯会」と称して開催、同じ年東京帝大は「帝大運動会」なる組織を結成して「陸上運動会」を開催し、翌年から正式に第一回の陸上運動会を開いた。そして両校ともにその後毎年運動会を開催して行く。(写真2)

もっとも、「運動会とお花見」と題した明治二五年の「風俗画報」の記事では(写真3)、

「運動会は今に始まりしにはあらずして、その名こそ異なれ維新前にもすでにこの事ありたり。そは寺小屋の師匠などが寺子をあまた引き連れて御殿山の花に戯れ三絃の師匠が弟子どもをうちつどへて、向島の桜に浮かれ、鬼事(おにごと)球つき種々の遊戯して一日を樂しむと更に変わりしことなし。ただ戯れの仕草にありて今の男子の遊びは旗奪ひ、球拾ひ、駆けくら等、女子は唱歌、隠れんぼ其他いろいろの遊びしあれど、その品とても昔の花見の遊事と大差なしと思はる」(18)

というように当時、運動会は、かつての遊山や花見とかわらぬものとされていた例もある。とはいえ、多数の小学生から、少数の選



写真3 郊外運動会及び嵐山花見の図(風俗画報、明治25年4月10日号)

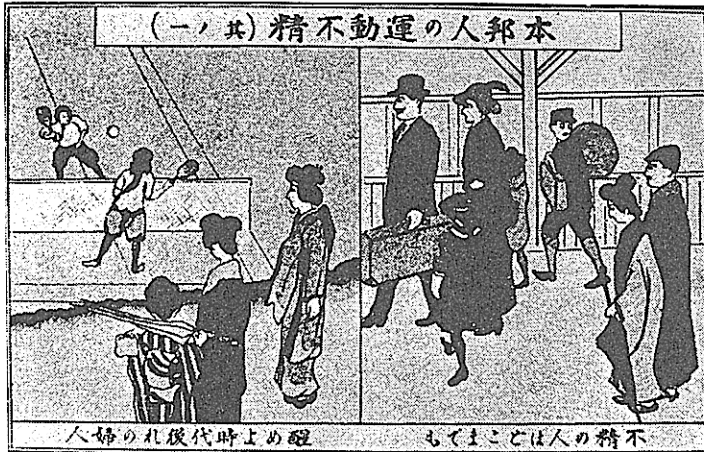


写真4・5 大正10年、運動体育博覧会における戸山学校出品ポスター

ばれた階層である大学生にいたるまで、運動会についての認識は広まっていった。ただ彼らの身体運動に対する旧来の態度はまだ根強く残っていたようだ。社会主義者を名乗り、都市改造論者を自認していた片山潜は、明治三五年「体育論」と題して次のように述べた。「我帝都書生の巢窟たる本郷神田に至りて、彼等が生活の有様を見よ。或は『トランプ』を弄し、花を遊び、煙を吸ひ、酒を飲む。し

かして彼らが体軀の薄弱、顔色の瘦衰なること、あたかも病余の如く、然り。かくのごとくにして活発なる精神耐久の思慮は、能く彼等の体軀に存するを得るか。」⁽¹⁹⁾
 このような学生は明治に限らず、現在ももちろん存在することは想像に難くない。しかし片山潜はここで「体育論」と題して演説し、学生の身体に限らず、日本人の娯樂のあり方についても意見を述べようとしたのであろう。

大正になっても、日本人の身体運動に対する消極性は告発される。例えばここに掲げた大正一〇年のポスターである。⁽²⁰⁾ (写真4・5)
 「本邦人の不精」と題して二枚のポスターにそれぞれ二つずつ、計四つの画面で日本人の「運動不精」を告発しようとしている。「不精の人はどこまでも」と題した絵では、駅の構内を二人の子供を連れていながら自ら荷物をもって連ぶ外国人夫婦と、子供もないのに赤帽に荷物を持たせて手ぶらで歩いている日本人夫婦を描いている。身のこなしが軽やかな外国人に対する鈍重な日本人という対比が絵ときで示されている。また「醒めよ時代後れの婦人」ではテニスをしている女性を眺める着物姿の三人の女性を描いているが、ここではテニスをしている女性の

三つ編みの髪、ニッカーボッカー風の服装は、明らかに「活動的」「新時代」といったイメージの象徴であり、日本髪に和服の三人の婦人の「不精」「時代おくれ」とのコントラストを視覚的に強調する記号の役割を果たしている。「子供は風の子」でも服装は同じく、「活発」や「不精」、「新時代」や「時代おくれ」などそれぞれの記号として表されており、雪だるまを作って元気に遊ぶ子供たちの服装は、ズボン・シャツの薄着の洋服で、それを眺める着ぶくれた二人の子供は和服なのである。

このポスターに現れた「世界一の運動不精」というフレーズは、いささか根拠のない非難と見えるが、それにしてもこのようなポスターが制作されたことは、スポーツないしは身体運動の普及に情熱を燃やす人々に、苛立ちがあることが感じられる。民衆を身体運動の場に引き出す試みが、あの手この手を使って行われていた。

「子供は風の子」というスローガンがいつから現れたのか、ここでは追求する余裕がないが、つい最近まで、特に学校教育の場面で耳なれたことばだったことが思い出される。このスローガンが長い間叫ばれたことは、日本人の身体運動への関心の低さを傍証することにもなるが、民衆が身体運動に示す消極性が根強く存在したことの現れであった。と同時に、子供たちを身体運動普及のターゲットにした国家による長期的な国民の身体改造への意欲でもあったろう。

5 遊びをせんとや生まれけむ

——スポーツと道徳的娯楽観

日本人は身体運動に消極的であるかどうか、近代における欧米スポーツとの接触の場面に注目して見てきた。本論の目的はここで、身体運動に対する日本人の姿勢を積極的にあるか消極的であるかどうかに断定することにはない。しかし日本人の間には、少なくとも開国当時から明治前半に限れば、接触した西洋諸国の人々に比べて、身体運動への著しい消極性が存在したと思わざるを得ない。

明治一〇年の東京において、アメリカからやってきたばかりのお雇い外国人で博物学者のモースは、日本人の身体動作がたいへん緩慢であったことを書き残している。

「人力車が出来てから間がないので、年とった人々はそれを避けねばならぬことを、容易に了解しない。車夫は全速力で走って来て、間一髪で通行人を曳き倒しそうになるが、通行人はそれをよけることの必要を知らぬらしく思われる。……反射運動というようなものは見られず、我々が即座に飛びのくような場合にも、彼等はぼんやりした形でのろのろと横に寄る。」⁽²⁾

たしかに人力車の普及は、まだそれほどではなく、人々はこのスピードのある動くかたまりになれていなかったとはいえ、また現在ほど人口が密集していなかったとはいえ、江戸時代にすでに世界でも有数の大都會であった東京の住民にして、ここに描かれたような

緩慢な身体動作であつたらしい。当時の日本人は、やはり身体運動に対しきわめて消極的だつたのだからか。

このように考えるとき、一方で、次のような古代歌謡の一節が思ひ出されるのである。

遊びをせんとや生まれけむ

戯れせんとや生まれけん

遊ぶ子供の声聞けば

我が身さへこそ動がるれ

〔梁塵秘抄〕⁽²²⁾ 卷第二・雑

これは、廓に身の自由を束縛されている白拍子の思いを詠んだものだという解釈がある。しかしここは、遊ぶ子供の明るく元気な声を聞いて、子供の振舞いを羨み、また子供たちの楽しい声は、自分たち大人を告発するメッセージだと捉えているとも解釈できようか。とくに、ここで使われている「遊び」「戯れ」とは、身体運動にかかわるものと受けとつてよいだろう。それでこそ「我が身」は、ゆるがされるような衝動にとらえられるのである。

身体運動は、子供には遊びでもあり戯れでもあり、その子供たちの明るい声は、今では身体を動かすことに何の喜びも見出せなくなつていた古き時代の大人をつき動かす力を持っていたのであろう。人類の本質を遊びのなかにとらえようとした『ホモ・ルーデンス』

の著者ホイジンガによれば、「技芸、力、忍耐の競争」は、遊びや祭りの余興として、古くからの文化でも重要な位置を占めてきた。またこの「技芸、力、忍耐の競争」は、スポーツの主要な形式でありまた本質であつて、太古このかた一定不変であるという。つまり、古くはスポーツと遊びはわかちがたく結びついていたと考えている。しかし遊びとたく結びついていたかつてのスポーツを、近代スポーツとして切り離し独立させてきたのは「組織化」「訓練」そして何よりも「真面目」であつた、とホイジンガはいう。⁽²³⁾ この考えは示唆に富む。

近代体育史の先学である今村嘉雄氏は、近代の日本教育界にスポーツの娯楽化、娯楽スポーツへの警戒観が流れていたことを述べておられるが、⁽²⁴⁾ 教育の分野に限らず、身体運動は「真面目」な領域でみとめられるものであり、娯楽とみなす観念は乏しく、子供の遊びの世界を除いて、娯楽の中に含まれていなかった。「兎戯に等しい」といった表現を持ち出すまでもなく、戯れとは子供の世界でこそ許される活動であり、大人の世界では評価としてカウントされないものだった。遊びという形で発揮される子供の身体運動への意欲は、大人の世界では抑圧され、その結果身体運動への消極性がはびこる。身体運動への消極性は、また身体への関心の薄さでもあり、身体への働きかけの消極性であつたかもしれない。

それは、権力や社会の規範など人々を取り巻く外部の方によつて

つくりあげられてきたものであるという考えは、あまりに平板すぎよう。

日本人の娯楽・レジャーの動向や、好まれる遊びやスポーツの種類、そして娯楽・レジャー・スポーツ施設の特徴をたつきりつかむことよって、はじめて日本人の身体観と近代のスポーツとのかわりが明らかになるはずである。

注

- (1) 『The Far East』一八七二年一月一六日号所載。
- (2) 小田切毅『アメリカスポーツの文化史―現代スポーツの源流―』不味堂、一九八二。
- (3) 清水重男『フランス近代体育史研究序説』不味堂、一九八六。
- (4) A・ガットマン(清水哲男訳)『スポーツと現代アメリカ』TBSブリタニカ、一九八一。
- (5) 山本邦夫・棚田真輔『居留外国人による横浜スポーツ草創史』道和尚院、一九七六。棚田真輔『居留外国人による神戸スポーツ草創史』道和尚院、一九七六。
- (6) 『新版・近代体育スポーツ年表』大修館書店、一九八六。
- (7) 慶応義塾大学編『慶応義塾大学百年史』一九六〇。
- (8) 貝原益軒(石川謙校訂)『養生訓・和俗童子訓』岩波文庫、一九六一。
- (9) 同前(8)
- (10) 同前(8)
- (11) 野村雅一『しぐさの世界』NHKブックス、一九八五。

- (12) 同前(8)
- (13) 倉田喜弘『明治大正の民衆娯楽』岩波書店、一九八〇。
- (14) 渡辺融『明治期の横浜における外国人スポーツ・クラブの活動と日本のスポーツ』東京大学教養学部『体育学紀要』第一〇号、一九七四。
- (15) (5)(6) 参照。
- (16) (5)(6) 参照。
- (17) (6) および、『風俗画報』第七四号(明治二十七年七月一〇日)。
- (18) 『風俗画報』第四〇号(明治二十五年四月一〇日)。
- (19) 片山潜『体育論』一九〇二。
- (20) 木下秀明『日本体育史研究序説』不味堂、一九七一。
- (21) E・S・モース(石川欣一訳)『日本その日その日(1)』一九七〇。
- (22) 『和漢朗詠集・梁塵秘抄』(日本古典文学大系73) 岩波書店、一九六五。
- (23) ヨハン・ホイジンガ(高橋英夫訳)『ホモ・ルーデンス』中央公論社、一九七二。
- (24) 今村嘉雄『19世紀に於ける日本体育の研究』不味堂、一九六七。